

Title	George Steiner and / or Lawrence
Sub Title	
Author	由良, 君美(Yura, Kimiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1963
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.14/15, (1963. 1) ,p.259(88)- 271(76)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西脇順三郎先生記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00140001-0271

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

George Steiner and / or Lawrence

由 良 君 美

(一)

ぼゞ2世紀にわたる科学技術の驀進的な発展が、人類とその社会の手に帰したエネルギーには想像を絶するものがある。ルネサンス以来の〈人神〉の夢は、この力を跳ね板として、いまや一挙になし遂げられんばかりの勢いである。戦後世界の未曾有の繁栄が讃えられ、経済学も社会学も〈ゆたかな社会¹⁾〉と〈自由な季節¹⁾〉の到来を必至とみて、福祉にみちた未来社会の構想に余念がない。(ただし、これには、〈第3次大戦²⁾〉さえ、幸いにして避けられたならばという、不吉な脚注が、つねに付きまわっているのであるが。)

その一方、われわれをとりまく現実の世界では、日常の悲劇が、かつてないまでに氾濫し、いまほど人間の威厳が地に墮ちた時代はないといわれる。〈騒音とアトム化³⁾〉の渦のなかで〈部分人⁴⁾〉に解体し、人格としての威厳を剥奪され〈物象化⁵⁾〉された人間、

1) いづれも I. K. Galbraith の著書の標題。ここでは、彼の論旨に必ずしも触れて言っているのではない。

2) もちろん C. Wright Mills, *The Causes of World War Three*, 1958. の考えを踏まえて言っている。Mills の Galbraith 批判を貴重なものとしたいからである。Mills の Galbraith 批判については、*The Sociological Imagination*, 1959. および、H. Aptheker, *The World of C. Wright Mills*, 1960. 参照。

3) Max Picard, *Die Welt d. Geräusche u. Atomisierung*, 1953-8. *Der Mensch u. d. Wort*, 1955. *Wo steht heute d. Mensch?* 1960. に展開されている、'ganzen Menschen' と 'atomisierten und reduzierten Menschen' の見事な対比を参照。

4) 'Teilmensch' については、丸山真男「政治の世界」1951, p. 77. の簡潔な記述を参照。

5) Cf. "Verdinglichung u. d. Bewusstsein d. proletariats", Georg Lukács, *Geschichte u. Klassenbewusstsein*, 1923.

が、美しい団地アパートの個室で、さまざまな完備した電気器具にかしづかれながら、退屈と空虚に圧殺され、無数の‘Mr Loneliness’¹⁾の世相劇を演出中である。かつては精神の平衡回復の最後の拠点であった癡狂の可能性さえも、ここでは、親切な精神医学によって、すっかり奪い去られている²⁾。Nerval も Hölderlin も Cowper も Clare も、もはや生れることはできない。

たしかに生存の局面は、刻一刻、繁栄の幻影の只中での悲劇の相貌を、ひたすらに深め、ひたすらに拡大してゆくかにみえる。

このような境位のなかで、それでは一体、文学はどのようになっているか。もしも文学というものが‘Mimesis’をその力学とするものであるなら、生存の現実面に深まりゆくこの悲劇を、文学はより高度の現実にく模倣し、かつてなく見事な悲劇文学を提出してもよさそうなものである。ところが……

〈文学としての悲劇は、もはや、その終焉を迎えようとしている。〉

この魅力あるテーゼが、俊秀 George Steiner³⁾の透徹した史的分析のメスの下に、有無を言わさぬ説得力を以て、われわれの前に示されたのは、つい昨今のことであった。あまりにも内包ゆたかな彼の立論は、軽卒な単純化を許さないが、さし当り、D. H. Lawrence の悲劇観とへの間の意外な近似性を指適することにより、Steiner 説の現代批評における位置と貢献について、管見を述べようとするのが、この小論の目的である。

(二)

〈現実のなかの悲劇〉と〈文学としての悲劇〉との間のこの乖離を、最も鋭く感じとっていった人の一人は D. H. Lawrence であろう。遺稿集 *Phoenix* (1936) に収められた

1) とくに Carson Macullers の秀れた諸作品を挙げたい。この事態の優秀な分析としては、Alfred Kazin, “The Alone Generation”, I. Fisher and R. B. Silvers, *Writing in America*, 1960. を挙げたい。Kazin はここで ‘Aloners’ という新語を造っている。

2) 精神分析治療と文学創作との敵対関係の最も早い言及は R. M. Rilke の書簡集に見いだされる。

3) Steiner (1929-)。アメリカ国籍の新進批評家。Paris 生。1940年に渡米し、French Lycée で勉学。Chicago 大学で B. A. Harvard にて M. A. Rhodes Scholar として Oxford Bariol College 留学 (1950-2)。London にて *Economist* の編輯陣に入る (1952-6)。Princeton 高等学術研究所に招かれ、処女作 *Tolstoy or Dostoevsky* を書きあげ、1959年出版 (Faber)。一躍、新進批評家として注目される。1961年に *The Death of Tragedy*, Faber. を刊行。現在、Churchill College Fellow として滞英中。邦訳書はまだない。雑誌論文の翻訳に拙訳がひとつある。スタイナー、由良君美訳「ジェルジ・ルカーチと悪魔の契約」、『三田文学』、1961年2月号。

た力篇“Study of Thomas Hardy”¹⁾のなかで、Lawrence は Hardy のいわゆる「悲劇」小説が、おなじ悲劇でありながら、古典ギリシアの悲壯劇や英国ルネサンスの Shakespeare 悲劇と比べ、どうしてあれほど、似ても似つかぬ貧相な内実しか把えられなかったかを、予言者的な眼光に照して診断しようとする。Lawrence の論旨を辿るに先だち、視野をわれわれの当面の問題に合わせるため、まず Shakespeare の〈自然〉を引き合いにだすことを許されたい。

Hardy が彼の時代の科学、それも特に Darwinism と遺伝学の圧倒的な影響から、宇宙をくまどろむ織師の織りなす意匠と考へ、自然のなかに非情な〈内在意志〉を認める pessimist になったとするのは、すでに文学史の常識である。しかしながら、〈影響〉云々をしばらく措き、自然観の類型としてみるならば、なんら新奇なものではなく、Sydney²⁾にも Shakespeare にも認められるものである。たとえば *King Lear* のなかで Gloucester が言うあの台詞：“As flies to wanton boys are we to the gods;/They kill us for their sport.” (iv. i. 36-7.)——この自然観を一步もでていないものである。Empson の考察によれば³⁾、この台詞は気紛れに言われたものではなく、Lear の全思考を要約したものであるという。そうとすれば、Shakespeare と Hardy との間には、この意味での自然観の連続があるといえよう。さらに、ギリシア悲壯劇を「運命」悲劇、Shakespeare 悲劇を「性格」悲劇とする通俗的な見方に従おうとも、Hardy はやはり、これらの要素を十分と備えているのである。〈運命〉に当るものとして〈盲目意志〉があり、〈性格〉悲劇の要素にも欠けていないからである。さし当り、Tess の弱さといったものでも念頭にすれば良い。また、悲劇の雰囲気不可欠とされる、宇宙を前にした人間の絶望的な〈卑小感〉も、多くの人々が Hardy 文学の基調であると論じた。悲劇としての道具立ては、これほど完備しておりながらも、Sophocles、Shakespeare と比較するとき、悲劇としての実質的な量感の不足と品質の低落は、Hardy の場合覆うべくもない。人間の絶望的な〈卑小感〉にしても、その〈卑小さ〉の実感が、dramaturgy を通じて漸次に昇華され、ついには逆に人間の圧倒的な〈威厳〉の感覚を喚びましながら、読者の前に大きく迫ってくるところにこそ、古来の悲劇の悲劇たるどころがあった。ところが Hardy には、それがない。Shakespeare と Hardy を距てる三つの世紀の間に、悲劇の

1) D. H. Lawrence, *Phoenix*, 1938, pp. 398-516.

2) Kenneth Muir (ed.), Shakespeare: *King Lear*, (New Arden Ed.), p. 149 fn.

3) William Empson, *The Structure of Complex Words*, 1951, p. 156.

風土を荒らす何事が起っていたとみなければならぬ。

推論の順序こそ異ってはいるが、上述の事柄は Lawrence の立論の土台をなすものといえよう。

Hardy の作品に、悲劇としての道具立てが何ひとつとして不足していないことを、Lawrence もまた承認する。

『主要な登場人場の背後に——宏大なモラルのなかに——はかり知れない〈自然〉の怖るべき演技を仕組んだこと。このことこそ、Hardy が Shakespeare, Sophocles, Tolstoy などという大悲劇作家と共有する特質である。¹⁾』

それならば、なにが Hardy や Tolstoy を Shakespeare や Sophocles と異なるものにさせたか。

『Shakespeare や Sophocles の場合、いまだかつて理解されたことのない巨大なモラル、つまり運命が、それをまとも¹⁾に犯したものにたいして、まともな断罪を下す。ところが Hardy や Tolstoy の場合、なるほど、稔小な人間界のモラル、つまり杓子定規の制度が、それを犯す主なる者を罰しはするが、しかし、ヨリ大きなモラルの方は、ただウジウジと弱気に犯されるに過ぎず、なにひとつまともな役割を演ぜず、主要人物となんの直接のつながりも持たず、ただ背景や風景のなかに在るものとして、表現されているに過ぎない。違うのは、この点である。²⁾』

秀れた才能に恵まれておりながら、Hardy をこのような事態に追いやったそれ相応の理由が、Hardy という芸術家の内部にあったと見ねばならぬ。Lawrence はその理由を求めて、一面、Hardy の時代相に、他面、Hardy の内的葛藤に降りてゆこうとする。

『Hardy においても、市民社会が意識されるようになっていたのではないだろうか。平均人ではない者はすべて破滅させる決意を固めたフランスの革命家たちのように。³⁾』

Lawrence の慧眼は、Hardy のなかに、市民社会のモラルの浸透を読みとり、しかもそれをフランス革命以降の〈西欧意識の危機〉の文脈のなかに起った事態として把んでいるのである。Lawrence の分析は Hardy の内心の葛藤に進む。

およそ芸術家というものは、意識的・無意識的に、一定の偏愛を抱いている。『想像力に富む人間に、すべて深く根づいている』この〈偏愛〉を、Lawrence は ‘*prédilection*

1) *Op. cit.*, p. 419.

2) *Op. cit.*, p. 419-20. なお、E. M. Forster の Hardy 批判は、簡潔ながら、最も良款的を射たものといえる。多くの点で、Lawrence の Hardy 批判を文学技法の面から裏付けるものといえる。Cf. Forster, *Aspects of the Novel*, 1927, pp. 89-90.

3) *Op. cit.*, p. 436.

d'artiste' と呼ぶ。『Hardy もこの〈偏愛〉を強烈にもっていた。¹⁾』それは『個性ある人物』にたいする偏愛であった筈だ。『我慾を満たすことに懸命な我利我利盲者ではなく、はっきりとした存在をもち、自分自身の個性的性質を充足させるために、独創的な行動にでざるをえない人物』²⁾にたいする偏愛を。〈平均人〉を超越し、『自分の生活を自己完成のために規制する、そのようなものとしての貴族』にたいしてである。ところが、市民社会の気風に右顧左眄しながら生きた Hardy は、Tolstoy 同様、この内心の偏愛を無理矢理に抑圧して、作品においては、『結局、小社会の側に立って、貴族を難せざるをえない破目となり、是非もなく、平均人の側に立って、例外人に反対する仕儀に陥る。』『だから Hardy は多少とも欠点の眼だため個人をでっちあげ、その個人が小社会によって、またはその個人の心中に巣食う小社会の代表や市民社会の観念の権化によって、破滅させられる姿』³⁾を形象化するほかはなかった。稜角なブルジョア社会のモラルが弱気な主人公によって犯され、小さな罰が相応に生ずるだけの話で、ヨリ大きな宇宙のモラルは主人公と直接のつながりを持たぬまに、ただ背景という篩窓に空しく放置されたままである。

だが過去の偉大な悲劇は、決してこのようなものではなかった。Oedipus, Agamemnon, Macbeth, Lear の場合、そこには『因習を超越するものがある。その葛藤は人間の本性のなかの、偉大な孤立した個性の力のあいだにある。小社会が押しつけてくるものと、情熱の命ずるところのものとのあいだに、あるものではない。』⁴⁾もちろん『あらゆる芸術作品は、なんらかのモラルの体系に執着する。だが真にそれが芸術作品であるなら、その執着するモラルにむかっただの根本からの批判がなければならぬ。ここからあの二律背反が、あらゆる悲劇の意図に必要な、あの相剋が生じる。』⁵⁾

Hardy の作品における〈悲劇性〉の衰弱の原因を求めて、Hardy の内面に下降し、その価値意識の無葛藤性を衝く Lawrence は、個々の作品分析を行いなから 'communist' という語を〈村落共同体人〉の意味に巧みにすり代えることによって、その語の現代的な意味の Parody を試みる。そのあたりが、この異色ある Hardy 研究の圧巻なのであるが、いまは立ち入る余裕がない。われわれはただ、フランス革命以降の道德観、いやむしろ、その人間観の、作家内部への浸透に悲劇の衰因をみる Lawrence に、留意すればよいのである。

1) *Op. cit.*, p. 436.

3) *Op. cit.*, p. 439.

5) *Op. cit.*, p. 476.

2) *Op. cit.*, p. 438.

4) *Op. cit.*, p. 439.

6) *Op. cit.*, p. 438. ff.

(三)

〈現実のなかの悲劇〉の進行と〈文学としての悲劇〉の展開との間のこの乖離の原因を辿って、はるかに壮大な史的展望のなかから、ほぼ同様の内部条件の指適に達したのが、George Steiner である。1961年に刊行された *The Death of Tragedy* のなかで、Steiner は劇形式としての狭義の〈悲劇〉に厳密に視野を限ることから始めて、まず悲劇の本質を措定し、ついでギリシア悲劇に始まり Shakespeare, Racine によって頂点に達し、以後、おびたしい文学者たちの悲劇復興への努力も空しく、ひたすら衰運にむかい、現代に至って、ほとんどその終焉を迎えようとしている悲劇の軌跡を、魅力ある叙述と縦横の博識に支えられた迫力ある遠近法のなかで、いきいきと描きだしてみせたのである。

『すべての人が、実人生のなかの悲劇を、よく知っている。しかし劇形式としての悲劇となると、決してどこにも知られていたものではないのだ。東洋の芸術も、暴力や悲しみを知っており、自然や人知の生みだす悲惨な不幸の与える衝撃を知ってはいる。たとえば日本の演劇には、凶暴さと儀式的な死が満ちている。しかし、われわれが〈悲劇〉と呼ぶ、あの個人的な苦悶と英雄の精神の表現は、実はヨーロッパ独自の伝統なのである。この伝統は、人間の行為のもろもろの可能性にたいする感覚の一部に、あまりにもなり切ってしまっており、Oresteia, Hamlet, Phèdre などは、われわれの精神の習慣の素地にあまりにも深く染み込んでしまっているので、個人の苦情を公けの舞台上で再演してみせるといことが、いかに異様で複雑な考えであるかを、忘れてしまっている。悲劇というものが意味している、人間の観念ないしヴィジョンはギリシア的なものである。だから、その没落のほんの間際まで、悲劇という形式は Hellas 的なものである。』¹⁾

だから、悲劇の本質はギリシア的なものにのみ求められるべきであって、ユダヤ的なものにも求められることはできない。しかし、「ヨブ記」は比類ない悲劇の書ではないだろうか。ところがその「ヨブ記」においてすら、神は最後のところで、おのれの〈貧しき僕〉たるヨブの忍苦を嘉し、それに報いているのである。だが、『報いのあるところ正義があり、従って、悲劇というものはない。』²⁾

エホバは怒り狂っていてさえ義しい。〈神の人間にたいする道は正し〉いのだ。これが Judaism であって、それは Marxism に継承されてゆく精神、正義と理性の裁きを信

1) Steiner, *Op. cit.*, p. 3.

2) *Op. cit.*, p. 4.

ずる精神である。Marx は言った：『必然ということは、その必然性が理解されない限りにおいて、盲目のものに見えるに過ぎない。』

しかし、悲劇はこれと正反対の断定から生れている。人間が〈盲目の必然性〉と出会うとき、人間はその眼玉を奪われる。Homer はその最初の表現であり、ギリシヤがヨーロッパに与えた最大の遺産は、この悲劇的感覚なのである。

Judaism の見方からすれば、災難は、なんらかの特定の道徳的過誤、またはその誤謬に発するものである。しかしギリシヤの悲劇詩人にとってはそうではなかった。人間の生を織りなし、それを破壊さす力は、人間の理性や正義の統制力の範囲の外にある。さらに悪いことには、人間の周囲には魔力が働いており、人間の魂に働きかけてこれを狂気に駆り、人間の意志に毒を注いで取りかえしのつかぬ憤怒を、われわれ自身に、または愛するものの上に課す。Antigone は彼女の身に、いづれふりかかる事態を完全に知っていた。頑なな心の底で Oedipus もこれを知っていた。にもかかわらず彼らは、この災難にむかって、抗しがたく歩を進めてゆく。激烈な運命的災厄は、人間の思慮よりも更に深い真実の手中にあるからなのだ。こういう認識は悲劇作家のヴィジョンであったばかりでなく、ギリシヤ人に共通したものであつたことは、たとえば Thucydides の描く悲劇的ヴィジョンの構図が全くこれと相通ずるものであるのをみれば、納得がゆく筈である。破滅にむかって進みゆくことを、全員が多かれ少なかれ承知しておりながら、なおかつ、Thucydides の描くあの艦隊は、Sicily に向って進んでいった。ギリシヤ悲壯劇の根底には、この〈非理性的な悲劇のヴィジョン〉がある。これなしには、悲劇の本質は成り立たない。ところがユダヤの人々にとっては、知識と行為との間には、あくまで連続性があり、ギリシヤの場合のように、逆説的な深淵によって、思慮と行為が距っていることがない。その実例として Steiner は面白いことを言っている。

『ギリシヤの悲劇的な非理性感が、まこと陰惨に描かれている Oedipus 伝説が、ひとたびあの偉大なユダヤ詩人フロイトの手にかかると、理性的直観と治療を通じての贖罪の象徴になり変ってしまう。¹⁾』(下線は引用者。)

要するに真の悲劇の概念は、破局的な事実が発せねばならず、その終末も〈めでたい〉ものであってはならない。悲劇のなかの人物は、合理的な思慮によっては、理解も克服もできない力によって押しつぶされるのでなければならない。災難の原因が一時のものであったり、技術的手段や社会的手段で解決されるものであれば、〈深刻劇〉は持

1) *Op. cit.*, p. 7.

つことができても、〈悲劇〉を持つことはできない。ここに、古典悲劇と近代悲劇との本質的な相違が生じる。考えてみるがよい。ヨリ寛大な離婚を認める法律がかりにあったとしても、一体、Agamemnon の運命は変っていたであろうか。社会病理学が果して、Oedipus の悩みに回答を与えてくれるだろうか。あり得ないことである。だが、Ibsen 劇のなかの深劇な危機の若干は、たしかに、ヨリ妥当な経済関係や経済計画があれば、解決可能なことといえよう。この相違は決定的なものである。正義・理性・秩序の領域は、もともと厳しく限定されたものであり、人知が科学や技術的資源の産出の上で、どれほど進歩を示そうとも、それらの適用範囲は、決して悲劇本来の世界に及ぶことはないのである。悲劇は語る：人間の内にも外にも、思慮を超えた〈他者〉が住っている。それは〈運命〉であり、〈隠れた神〉であり、〈動物的な血の狂暴な怒り〉である。それは途上でわれわれを待ち伏せ、嘲笑し、われわれを破滅させる。時には Euripides の *Bacchae* のように、犯した罪を上まわる罪を平然と下す。しかし、打ちひしがれ無力な盲目の乞食となった Cadmus が、Thebes の町を追いたてられてゆく結末のところ、彼の姿は、いまだかつてない威厳を帯びるのをわれわれは感ずる。彼は神々の不正によって、かえって崇高になったのである。およそ偉大な悲劇の結びには、悲愁と歓喜、没落への哀悼と精神の再生を喜ぶ気持との、混然たる融合が生ずるのも、このためといえる。悲劇において、この不可思議な効果を達成した文学形式は他にない。古代ギリシヤから Shakespeare, Racine 時代に至るまで、このような崇高な効果は、人間の才能の達しうる範囲内にあつた。だがそれ以後、演劇における悲劇の声は薄れ、ついには絶滅に瀕するかのようと思われる。

(四)

以上のように悲劇の本質論を展開し、悲劇の運命をのべたのち、Steiner は第2章において、Chaucer による悲劇の定義から説き起して Shakespeare に至る英国古典悲劇の遺産を省みる。Shakespeare の真の理解には、いかに彼が中世の想像力の遺産、祭式、象徴法の豊かな先例を下敷き¹⁾にしているかを知る必要があることを説く。第3章では、Corneille, Racine のフランス古典劇の独自の貢献を、Milton, Schiller との適切な比較

1) このあたりで、Steiner は Schücking, W. W. Laurence, A. Harbage, S. L. Bethell, J. F. Danby 等の、近年の Shakespeare 学の成果を十分に消化している。

を点綴しつつ、次章への伏線として論ずる。ロマン派悲劇群を扱う第5章こそは、おそらく *The Death of Tragedy* のなかでも、最も独創的かつ説得的な部分であり、Steiner の全論旨の立脚点も、この章にかかっている。

ロマン派が Neo-classicism にたいする果敢な攻撃によって文壇に登場した時、それが〈演劇の名において〉行われた攻撃であったことは、実は忘れてはならない意味もっている。Elizabeth 朝演劇と Baroc 劇場のあの偉大な伝統を、18世紀文壇は担い切る力をもたず、光栄ある遺産を放棄したことを、ロマン派は鋭く糾弾したのである。¹⁾ というのは、演劇の生命力と時代の社会的健康とは、不可分のものであるという信念が、ロマン派にはあったからである。古典時代の Spain, France, England の演劇のあのめざましい噴出は、それぞれの国民的 energy の爆発と結びついていたとロマン派は考える。ここから、彼らに特有の〈社会批判と詩学との結託〉が生れてくる。だから、ロマン主義運動の核心には、演劇再興への激しい衝動がこめられていること：彼らの詩論は現実の dramatization にほかならないということ；これを見落す時、われわれはロマン主義運動の真の意味を見過すことになる。Neo-classicism の醜態を激烈に難ずるロマン派は、当然おのれの栄光を、悲劇を過去の高みに戻す仕事にかけたのである。Blake は *Edward III* を、Wordsworth は *The Borderers* を、Coleridge は *Osorio*, *Zapolya* を、Southey とともに *Fall of Robespierre* を、Landor は4つの悲劇を、L. Hunt も習作を、Shelley は *The Chenci*, *Prometheus Unbound* を、Keats は *Otho the Great*, *King Stephen* を、Beddoes は Gothic 劇を書いた。まことに枚挙にいとまがない、その制作ぶりであった。²⁾ しかし結果は？ 言語の上での新生面の展開は認めえても、悲劇作品としてみる時、それは累累たる死屍にも等しいものであった。なぜであろうか。まず俳優の問題があり、客観的条件として、観客層の変質があり、最後に最も重大なものに、Rousseauism の作家内部への滲透があった。

当時の俳優は極端な感情表出や、過剰なリリズムを偏好した。これが時代の 'melodrama' 愛好と結びつき、特有の弊害を生じた。特定の俳優を念頭に置いて創作する場

1) *Op. cit.*, pp. 108-9

2) ロマン派の劇作品は、文学史家によって、ほとんど不当なまでに無視されてきた。わずかに、G. Wilson Knight の見事な研究 *The Star-lit Dome*, 1941. が正しい評価を与えたに止まり、他は Bertrand Evans, *Gothic Drama from Walpole to Shelley*, 1947. が、側光を与えたにすぎなかった。G. Wilson Knight は近著 *The Golden Labyrinth, A Study of British Drama*, 1962. の第3部において、ふたたび、ロマン派劇作群に新鮮な考察を加えている。

合、作家はこの弊風の牽制をうけざるをえない。その結果、作家は特定の一登場人物だけが重要で、他は影の薄い‘monodrama’を創作する。Keats などはその例である。¹⁾また観客層の問題として、当時はすでに Elizabeth 朝のような〈共通の想像的反応〉によって結ばれた〈観客共同体〉も、Racine 劇の観客のような〈閉された社会〉も喪失されていたのである。²⁾時代は‘bourgeoisie’の勝利によって、中産階級の圧倒的な進出がみられた〈フランス革命後〉の境位にあった。この新しい観客は、高度の悲劇が内包する恐怖も啓示も理解することはできず、気晴らしと新奇さを求めて、『ポケットに読みさしの新聞紙をつっこんで』³⁾劇場に通ってくる連中であつた。勢い深刻ものは敬遠され、劇は現代のそれと変らない単なる娯楽に墮したいった。

一方に悲劇再興の使命感を抱き、眼前に観客層の解体と低下を見、脳裡にはフランス革命の理想の明白な挫折を噛みしめざるをえなかったロマン派は、その悲劇作品に、どのような弱点を孕むことになったか。

ロマン主義と革命とが、本質的には結び合った現象であることが、ここで考えられねばならない。⁴⁾〈Descartes=Newton 思考〉の演繹的な味けない合理主義から思想を解放し、理性の桎梏から〈想像力〉を解放し、個人を社会の生得の階層制から解放し、要するに、古典主義的合理主義の想像力の凋落と旧制度の枯死状態から、個人の原子をロマン派は覚醒させた。この仕事が政治面に現われるとき、ロマン主義運動は〈フランス革命=Napoleon 戦争〉という一聯の連鎖反応となつて、ヨーロッパの土台をゆするあの衝動となつた。

しかし問題は、その解放衝動の中核に Rousseauism があつたことである。人間の悲惨も不正も、神の恩寵からの墮落が惹起したものではなく、人間本有の悲劇的欠陥によるものでもない。すべては人間が己れの手で造りだしたものにすぎず、従つて人力と人知によるその変革は可能であり、未来をほしいままに変革する力は人間的手中に握られている。人間は〈完全〉になる潜在能力を持っている。——この〈完全説〉がロマン主義思考の根幹となり、ロマン派悲劇の構成の核心に巢食うこととなつた。環境改善による完全化の幻想が、地獄への扉を永久に閉じてしまったといえる。悪の問題が人間に本有の魂の問題ではなくなつた瞬間、実際は、真の悲劇が書かれるべき条件も、同時に消失してしまつたのである。このため、ロマン派の悲劇作品では、主人公が決定的な真実

1) *Op. cit.*, p. 112.

2) *Op. cit.*, pp. 114-5.

3) Goethe, *Faust* の‘Prologue’にある言葉。

4) *Op. cit.*, pp. 124-5.

に直面する瞬間、彼が罰へと導かれる必然がなくなり、そのかわり、皆一様に〈悔悟〉ないし〈悔恨〉へと導かれることになったのである。¹⁾ ロマン派の〈悪〉の認識が、〈悔恨〉を‘leitmotif’とするに至った理由は、おそらくこの事態の中にある。*Ancient Mariner* 然り、*Faust* 然り、*Götter Dämmerung* 然りである。この〈悔恨の神話〉が Calvinism の暗澹たる〈予定説〉から精神を解放した功績は讃えられてよい。しかし、この神話が、以後、西欧悲劇の成立の可能性を不断に扼殺しつづける原因を作ったのである。

このように説き進む Steiner は、Schiller 劇の性格描写の弱点を抉り、Goethe の *Faust* の結末に、〈幸福な昇天〉と〈環境改善の夢〉が併存していることを析出する。そうして、これらの悲劇は、一言にして尽せば、〈擬悲劇〉(‘near-tragedy’) にほかならず、言うならば、‘melodrama’ の〈またの名〉にほかならないと断じてゆく。³⁾

それに続くものは、後期ドイツ・ロマン派悲劇の分析であり、また異常に広汎な博識を駆使しての諸国近世悲劇の代表作の吟味であり、現代の Cocteau, Clandel, Brecht へと Steiner の考察は燎原の火のように、及んでゆく。彼の態度は鋭敏そのものであり、各頁が幾多の啓示を孕み、読者を飽かせないものをもっている。

この論旨と併行して、『有機的世界観およびそれに伴う神話・象徴・祭式の含みをもつ文脈の凋落』が悲劇の衰亡と密接に結びついていることの指摘がなされ、〈悲劇の終焉〉という事態の背後に文明論的な含蓄が潜む次第を、適当に読者に意識さす用意も怠たられてはいない。

(五)

ここまで述べてくれば、〈悲劇の衰亡〉をめぐる Steiner と Lawrence の所論のもつ parallelism は、おのずから明らかであろう。Steiner は〈悲劇〉を厳密に劇形式としてのそれに限定し、歴史の広大な展望の下に論じた。Lawrence は〈悲劇〉的内容の近代小説を取りあげ、Hardy 一個人を論じた。しかし、Lawrence の議論もギリシア悲劇を Hardy に対置させることで立論の根拠を得ることができた。Steiner も、たとえば Wagner の楽劇や Shelley の詩論を適宜に傍証とすることにより、論旨を強固にするこ

1) ロマン派における中心的気分として、「悔恨」を考え、その Coleridge における展開を辿ろうとしたものに、拙稿「コールリッジと悔恨」(上)、『三田学会雑誌・日吉特別号』第2集 1957; 「コールリッジと悔恨」(中、上)、『日吉論文集』4, 1959. があるが、中絶したままである。Steiner の所論とは別個に、今後の展開を予定したい。

2) *Op. cit.*, p. 127.

3) *Op. cit.*, p. 133.

とができた。操作する脳内反射鏡は互いに異りながら、近代作家の脳裡の病巣に両者が認めた病源は、意外にも一致していたのである。

歴史的境位として、悲劇の風土の荒廃化を〈フランス革命後〉に設定したこと的一致；内面的要因として、市民社会の論理とエトスの作家内部への侵犯——それには、キリスト教、Rousseauism ないし〈完全可能性信仰〉が絡んでいる——を挙げたこと的一致であろう。しかし、人は言うかも知れない。Lawrence の Hardy 論においては、〈キリスト教〉の問題も〈完全主義〉の問題も述べられていなかったではないかと。実は〈反キリスト教思想〉と〈反完全主義〉こそは彼の〈反デモクラシー思想〉の成立を可能にさせた当のものであり、いはば Lawrence の魂の鬚根なのである。〈Isis=Osiris 信仰〉に回帰することによって、キリストの霊的復活という幸福な結末を拒否して、古代異教の世界の〈再生〉神話の ritualism に晩年の思想を深めていった孤高の Lawrence のなかには、〈現実の悲劇〉の増大と〈文学としての悲劇〉の退化との間の乖離を埋めようとする熾烈なドラマがあったのである。Lady Chatterley's Lover の冒頭の唐突な書きだしは、恐らくこの文脈のなかで、始めてその充全の意味を露呈する。〈完全主義〉批判は、Lawrence の発想のいたる所に認められる。最も顕著な例として、Franklin 論を挙げておこう。それは Studies in Classic American Literature 全巻を貫く leitmotif であることは、定稿から削除された章“³⁾ The Principles”が証しするところである。Steiner と Lawrence は、世紀を距てて〈悲劇の終焉〉を眺めるおなじ Pisga の山にいたのである。さて Steiner は、この山を今後どのように降りてゆこうとするのであろうか。

〈Perfectibility の批判〉は、〈満足批判〉に他ならない。‘Critique of Satisfaction’は、T. E. Hulme の掲げた色鮮やかな旗であった。この旗の下に彼は、Renaissance 以降の人間観を爆撃し、とりわけロマン派に厳格であった⁴⁾ Rousseauism がロマン派を脆弱にしたという砲声を轟かしたのは、Irving Babbitt⁵⁾であり、その弟子 P. E. More であった。文明批評の態度において、彼らの新古典主義を、正統キリスト教の側に修正しな

1) Lawrence のこの側面については、*The Man Who Died*, (1931) のなかの Isis=Osiris-worship と Christ Mythology の関係を、断片、*The Risen Lord* (W. Y. Tindall, ed, The Later D. H. Lawrence, 1952, pp. 386-393) と比較されたい。なお、それには、*Pansies* (1929) の symbolism が参照さるべきである。

2) *Studies in Classia American Liferature*, Anchor Ed., 1953, pp. 19-31.

3) Armin Arnold (ed), *The Symbolic Meaning, The Uncollected Versions of “Studies in Classic American Literature”*, 1962, pp. 175-192.

4) T. E. Hulme, *Speculations*, 1924. pp. 12-23.

5) I. Babbitt, *Rousseau and Romanticism*, 1919.

から摂取した T. S. Eliot もロマン派に酷であった。しかし、その Eliot が「19世紀におびただしい量の知識……が蓄積されたことが、それにおとらぬおびただしい無智を生む原因となった。」¹⁾と述べた時、〈悲劇〉的認識のみが与えうる（物質的進歩繁栄と平等社会の進展とも無縁な）あるものの凋落の起源とその現況を、彼は正しく感じとっていたのである。今日、Hulme も Eliot も、その掲げた古典主義の旗にもかかわらず、結局はロマン主義の大河に棹さず、ささやかな筏舟とする史観が成熟しつつある。²⁾

Rousseauism をその養土にするとはいえ、Napoleon 戦争による祖国の疲弊と、Benthamism の描く産業社会の繁栄の幻想を前にして、〈満足批判〉の形而上学を美学と厚生経済学にまで構築した最初の人々が、実は Coleridge であり、Wordsworth であり、Southey であったことを思い起すならば、これは当然の成りゆきといえるのである。〈悲劇の終焉〉の認識は〈満足批判〉と手をたずさえて歩む。

今日、イギリスの若い人々が、New Left の立場から、彼らの遺産を新しい解釈の下に継承し、戦後世界の繁栄の虚像に挑戦する新たな道程を模索しようとする時、大衆社会状況の発生源をロマン主義と同時点に置き、William Morris とともに Lawrence をも再評価する挙に出、³⁾実際に〈満足批判〉という言葉を使用している⁴⁾ものも、なんら不思議なことではないのである。彼らの求めるものは、現実の悲劇を終焉させることであり、また同時に、荒れ果てた悲劇文学の風土をも耕すことにあるからである。

1) T. S. Eliot, *The Sacred Wood*, 1920, p. 9.

2) Herbert Read, *The True Voice of Feeling*, 1953. Frank Kermode, *Romantic Image*, 1957. John Bayley, *The Romantic Survival*, 1957. R. A. Foakes, *The Romantic Assertion*, 1958. とりわけ Kermode の研究は重要である。問題は、しかし、Symbolist-Romantic equation を Image の面から説明するだけでは尽すことはできない。更に思想的な展開の余地が認められる。

3) Raymond Williams, *Culture and Society 1780-1950*, 1958; *The Long Revolution*, 1961; *Communications*, 1962. E. P. Thompson, *William Morris*, 1955. なお、New Left の立場については、拙稿「Raymond Williams の仕事」、『英語青年』, 1962, 3月号; 「ホガートのマスコミュニケーション論」、『オベロン』, 6巻, 1号, 1962, 参照。

4) E. P. Thompson (ed.) *Out of Apathy*, 1960, p. 236.